学校設定教科「演劇」におけるワークショップ型授業の展開
～コミュニケーション能力開発を目指した授業実践～

福島県立いわき総合高等学校　教諭　齋藤夏菜子(英語科)
同　教諭　佐原　輝明(国語科)
同　教諭　住吉　智子(国語科)
同　非常勤講師　谷代　克明(国語科)
同　元教諭　石井　路子(国語科)[*1]
同　校長　吉田　豊彦(論文執筆責任)

１　本研究の趣旨

福島県立いわき総合高等学校は、学科改編後10年間、教科「演劇」の授業を創造し、演劇の手法を活用したコミュニケーション教育の実践を積み重ねてきた。演劇を含む芸術表現系列の授業を典型として学びと表現に重きを置く本校の教育課程は、学校全体にコミュニカティブな雰囲気を作り上げ、校是である「個性・自律・創造」を実現している。

学校教育においては、コミュニケーション能力開発の重要性は叫ばれつつも、「具体的にどうしたらよいかわからない」状況にある。言語を媒介とする指導にのみ頼っては、自己開示や人間関係の洞察は難しい。

そこで、本校の実践が、「コミュニケーション教育の具体的な展開の仕方」、「学校教育において芸術の果たす役割の考察」、「在学中に学んだことを表現する教育の充実（上級学校進学のための学びを超えて)」等の学校教育の課題の解決や教職員研修等の質的改善に貢献できるのではないかと考え、検証・考察した。

２　本校の教育の概要

(1) 教育課程の概要

本校の教育課程は、次の2つが大きな柱となっている。

①１年次必履修科目「産業社会と人間」から2年次の「総合的な学習の時間」、3年次全員が取り組む課題研究にいたるキャリア教育

②自然科学・人文国際・情報・芸術表現・スポーツ健康・生活福祉の６系列に渡る多様な授業

1年次に履修する「産業社会と人間」においては、本校独自の『Career Design Book』に基づいて、数多くの外部有識者や企業、大学の協力により、自己と社会の理解、職業観育成を進め、セルフイメージとライフプランを作成し、作成したライフプランを発表する等、多岐にわたる活動が展開される。その過程で、6つの系列、100を超える授業から、必要な科目を選択し、2・3年次の時間割を作成する。

2年次からは、選択科目中心の授業を受けるとともに、『課題研究の手引き・プレ課題研究ノート』、『課題研究ノート』に基づいて、主体的に選んだ研究テーマについて調査研究を行い、報告書にまとめ、発表する。

(2) 芸術表現系列・演劇　におけるコミュニケーション教育

6つの系列の中の芸術表現系列では、音楽・美術・演劇の専門教育を展開している。中でも、学校設定教科「演劇」は、県内では本校のみで開講されており、現在、「舞踊Ⅰ・Ⅱ、演技・演出、演劇総合演習、日本舞踊、演劇表現」の6科目によって、知性・心性・身体性の統合的な発達を目指したコミュニケーション教育を展開している。授業の一部として、校内、いわき市内、東京等で公演を行い芸術の振興に寄与すると共に、舞台芸術としても高い評価を得ている。

3 コミュニケーション教育の現状と課題

(1) コミュニケーション能力の定義

コミュニケーション能力は、様々に定義されている。

文部科学省は、平成23年8月の「コミュニケーション教育推進会議中間報告」[*2] において、「コミュニケーション能力」を、下記のように定義している。

様々な価値観や背景を持つ人の集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない課題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力

また、平成23年1月の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」においては、キャリア教育で育成すべき「基礎的・汎用的能力」の1領域である「人間関係形成能力」の中に、「自他の理解能力」と併せて「コミュニケーション能力」を位置づけた。

多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力

企業が求める人物像においても、コミュニケーション能力は最上位にある[*3] が、学校現場においては、まだまだ、統合的なカリキュラムはできあがっていない。

本研究では、OECDのキー・コンピテンシー[*4] と関連させて、コミュニケーション能力を定義した。OECDのキー・コンピテンシーは、未来を生きる生徒の幸せな人生と社会の発展にとって重要な能力として定義されている。それらは、①様々なツールを相互作用的に活用する能力、②多様な集団における人間関係形成能力、③自立的に行動する能力の3領域からなる。本研究では、これらの能力を、それぞれ、社会・他者・自己と良好な対話ができる力と捉え、これらを以て本校が育成するコミュニケーション能力と位置づけた。

本研究におけるコミュニケーション能力は次の3領域である。

①自己と対話できる能力
②他者と対話できる能力
③社会と対話できる能力

(2) 本校におけるコミュニケーション教育－知性・心性・身体性を統合して行う教育

本校の教科「演劇」では、多様なワークショップを通して、自己と対話し、他者と議論し、学校や社会の中での個人の在り方を考察させ、そこで学んだことを、作品創作・公演という形で表現させている。自己との対話、他者との対話に重きを置いていると言えるが、その大きな特徴は、身体の重要性に着目していることにある。

そもそも、コミュニケーションスキルの育成は、本校の教育活動全体の特徴でもある。全員履修科目「産業社会と人間」、「総合的な学習の時間」、「課題研究」及び各教科の授業において、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力の育成等を図っている。しかし、まだまだ、言語を媒介とする指導に集中しがちである（スポーツ健康系列においては、逆に、身体表現中心の授業が展開される）。教科「演劇」においては、「舞踊Ⅰ・Ⅱ、日本舞踊」等、そもそも、身体表現を中心とする科目もあるが、全ての授業において、非言語的な感性や身体性を大切にし、知性・心性・身体性の調和を重視した統合的なカリキュラムとなっている。

4 授業実践

(1) 芸術表現系列・演劇　関係科目

芸術表現系列の学校設定教科「演劇」において、「舞踊Ⅰ・Ⅱ、演技・演出、演劇総合演習、日本舞踊、演劇表現」の各科目の開発・実践に取り組んでいる。授業の構成については、「2年次の4月から7月までは入門期として信頼や解放などの基礎的なプログ

ラムの他、声や身体コントロールなどのプログラムを経験する。この入門期ではプログラムの内容が「できる」かどうかということよりも、そのプログラムを通して自己を発見させることに重点を置いている。（中略）3年次になると基礎的プログラムの他にフォーカシングやキャラクターなど、表現のためのプログラムが多くなる。」[*5]

〈2年次総合選択科目〉

①舞踊Ⅰ　4単位

モダンダンス、ジャズダンスを通して演技に必要な身体感覚を目覚めさせ、自分で自由に身体をコントロールできるようにすることが目標である。モダンダンスではクラシックバレエの基礎レッスン、ジャズダンスでは筋力トレーニングなども行う。ダンスの専門家を特別非常勤講師として招聘している。

②演技・演出　4単位

心身の解放、発声法など演技に必要な身体と声を獲得するための基礎レッスン、訓練方法を習得する。後期には、照明及び音響の専門家を特別非常勤講師として招聘し、舞台技術の基礎を学ぶ。毎時間のはじめには、「あいさつ」という寸劇を受講者全員で作るなど実際に作品を創作する。年度末には、公開試験として、モノローグ作品『自画像』公演を行い、舞台制作の現場を体験するとともに、ポスター制作、広報活動等の実践等も併せて、総合的なコミュニケーション力の育成を目指す。

〈3年次総合選択科目〉

③舞踊Ⅱ　4単位

舞踊Ⅰからの継続履修科目。ダンスの専門家を特別非常勤講師として招聘している。

④演劇総合演習　4単位

2年次の「演技・演出」を基礎として、表現者として必要な演技・演出・舞台技術や、自身がコントロールし、より高度な表現が出来る身体を作り、多人数での表現の核となる創造的な集団づくり等を学び、高次の総合的なコミュニケーション力の育成を目指す。毎時間のはじめには、「あいさつ」を受講者全員で作る。外部の演出家を特別非常勤講師に招き、科目履修生徒との対話を通じて作品を作り、３年次夏休み中に公演を行う。※２年次に「演技・演出」「舞踊Ⅰ」、３年次に「舞踊Ⅱ」を履修していることが履修条件である。

⑤日本舞踊　2単位

日本舞踊の所作を身につけ、伝統芸能の中の美意識を知り、浴衣の着方、日本舞踊の所作・扇の扱い、振り付けを記録するための振り書き、日本舞踊史等、日本舞踊に対する理解を深める。男型、女型、組踊り、江戸舞踊のそれぞれの曲を１年間を通じて学ぶ。日本舞踊の専門家を特別非常勤講師として招聘している。

〈２・３年次自由選択科目〉

⑥演劇表現　2単位

身体を使った心身解放プログラムを体験し、自己と身体と心のつながりに気づかせるとともに、自分の声やその用い方について意識させる。また、信頼やコミュニケーションに関するプログラムから、自分自身の不安や恐れ、他者との関わり方について考えさせ、自己への気づきから他者との関係、人間洞察へとつなげ、総合的なコミュニケーション力の育成を目指す。一般生徒向けのコミュニケーション力育成授業である。

〈大学との連携〉

⑦2・3年次系列演劇選択者による大学訪問

例年7月に、桜美林大学芸術文化学群及び桐朋学園芸術短期大学等を訪問し、授業参観、実技公開試験見学、学生との交流会等を実施している。

(2) 「演技・演出」「演劇総合演習」の授業概要

①あいさつ[*6]

授業の冒頭10分間で、生徒全員で寸劇を作成する。テーマも生徒が決めている。劇が完成すると生徒が教師を呼びに来る。教師の前で生徒が作り上げた劇を表現し、そ

の最後は、教師に対する「おはようございます」で締めくくられ、授業がスタートする。

②ワークショップ(体験型講座)

授業の中心をなすのは、身体表現を使った集団によるワークショップである。例えば、平成26年度「演劇総合演習」における、4月15日と5月15日の授業略案は、次のようなものである。

〈4月15日〉

1　あいさつ創作
2　生徒による自己目標設定(生徒主体、将来の目標・進路目標を含む)
3　声と身体の基礎訓練
　①ストレッチ
　②ランダムウォーク
4　ボイス
　①ボイスアップ
　②ボイス表現
5　まとめ（表現の分野に入る３年生としての自覚、より深い自己との対話による自己特性の理解）

〈5月15日〉

1　あいさつ創作
2　ストレッチ
3　声と身体の基礎訓練
　①ゲーム「この人は今・・・」
　②ポーズゲーム
　③フィジカルコミュニケーション
4　まとめ

「ランダムウォーク」は、正しい歩き方のチェックから始まり、アイコンタクトで「おはよう」を交わしたり、リーダーの指示するポーズでストップモーションを行う。自己の身体と対話（身体をコントロールしているか、集中し続けられるか、顔の表情に頼りすぎていないか等）しつつ、他者との対話（積極的に関わろうとしているか、相手の出したアクションを受け止められるか、言語的・非言語的会話が成立しているか、一方的な押しつけになっていないか等）の力を向上させることを目的に行われる[*7]。

「ゲーム「この人は今・・・」」はペアＡＢで行われる。Ａは全身で、あるポーズを取る。Ｂは、Ａがどのような人を表現しているのかを探るのであるが、それは、両者の対話によって行われる。Ａは関連するポーズに適宜変えるなどのバリエーションもできる。観察力、創造力、瞬間的な反応、質問力、他者への興味等を意図してプログラムされる。

「ポーズゲーム」は、生徒が出すお題に対応したポーズを瞬時に表現するゲーム。「フィジカルコミュニケーション」は、意識と身体を切り離しコントロールするためのトレーニングを目的として行う。思考の奥にある表現力を引き出すことを目指す。

このように、2年次から3年次にかけて、生徒の自分自身や他者のとの対話力の開発段階に応じて、多様なプログラムが展開される。

③自画像公演

自画像[*8] とは、「ありのままの自分を見つめ、自分自身を一つのモノローグ芝居として作品化するプログラム」である。校内のアトリエで開催され、本校の生徒・教職員が観客となる。石井路子(2008)は、教育の中での「演劇」の目的を次のように述べているが、これは､自画像公演において、最も顕著に求めるところである。

教育の中で「演劇」を行う時､数多くある目的の一つに「自己を見つめ、発見し、その自己を表現する」ことがある。その子どものリアリティ、身体に根ざした言葉

を引き出し、表現へと結びつけていくこと、そこには借りものの言葉も身体も、正しいものの言い方を強要されることもない。むしろできるだけ嘘のない自分自身の言葉や身体を発見し、コントロールして観客へ提示していくことが要求される。

④卒業公演

例年、特別非常勤講師としてプロの演出家を招き、講師と生徒との対話によって作品が作られ、いわき芸術文化交流館アリオスにおいて公演が行われる。

平成24年度までは、2年次にアトリエ公演が行われていた。平成24年度アトリエ公演「ブルーシート」を演出した飴屋法水氏は、この作品で、第58回岸田國士戯曲賞を受賞した。

5　評価[*9]

(1) 評価項目と評価の観点

本研究で定義づけたコミュニケーション能力の開発状況を評価するために、演劇科目「演劇総合演習」を履修している第11期生に対して、アンケート調査を実施した。

①アンケート調査の概要

実施日　　平成26年8月27日
対象　　「演劇総合演習」履修生徒　3年次生第11期生12名
質問紙　　別添資料５
評価項目　1自己理解　2他者理解　3社会の理解　4表現力　5意欲　6創造性
その他　　アンケート調査には、各自の思いや考え、「舞踏Ⅰ・Ⅱ」等身体表現を主な目的とする科目、職業選択や生き方への影響等の自由記述を加え、併せて、4名についてはインタビューを実施した。

②アンケートの解析

下は、調査項目の1つ「1自己理解」に関する3つの質問とその回答例である。それぞれの質問について、4段階で回答してもらい、点数化し、「入学時の自分」と「今の自分」の間の変容を調べ、項目の平均値を出した。「－」と「＋」の間を他の2倍で点数化したのは、相対的なマイナス評価からプラス評価への変容を重く見たからである。

〈質問項目　1自己理解の質問と回答・点数例〉

項目	入学時の自分				今の自分			
	－－	－	＋	＋＋	－－	－	＋	＋＋
１　自己理解								
①自分に興味がある、自分を肯定的に捉える				○			○	
②自分を客観視する（根拠を明らかにして考える）	○						○	
③正当な自己主張をする	○					○		

この回答に関する変容の数値は、次の計算により、＋1.0とした。

入学時の自分　＋2－2－2＝－2　　今の自分　＋1＋1－1＝＋1

「1自己理解」に関する変容　｛＋1－(－2)｝÷3＝＋1.0

※　記号の意味と点数

	評価	点数	
記号の意味	－－	－２	できない、苦手である、思わない
	－	－１	どちらかといえばできない、どちらかといえば苦手である、どちらかといえば思わない
	＋	＋１	どちらかといえばできる、どちらかといえば得意である、どちらかといえば思う
	＋＋	＋２	できる、得意である、思う

③アンケート結果

下にアンケート結果の概要を掲げる。

質問項目	変容の平均値	最小値	最大値
1自己理解	＋1.7	＋1.0	＋2.7
2他者理解	＋1.4	＋0.3	＋2.7
3社会の理解	＋1.6	＋0.3	＋3.3
4表現力	＋1.0	－0.7	＋3.3
5意欲	＋1.6	＋0.8	＋3.0
6創造性	＋0.8	－1.0	＋2.0

平均値は、6つの質問項目全てで、正の変容を示した。全体的に、「今の自分」について、各項目のマイナス評価が大幅に減り、自己の思考や行動を肯定的に捉えられるようになった。

負の変容の評価をした生徒は、「4表現力」で1名、「6創造性」で2名であった。これらは、それぞれ、「質問⑫自分の言葉、声、アイコンタクト、身体の表現には説得力がある」「質問⑱創造することに集中する」の自己評価を下げた生徒であった。

(2) 生徒の変容

「4表現力」でマイナス評価をした生徒1名は、自己表現に興味があり客観視できるようになったが、自分の表現力には、まだ説得力はないと考えた生徒である。また、「6創造性」でマイナス評価をした生徒2名は、いずれも創造することへの興味は高いものの、集中できていないと考えた生徒である。後者2名にインタビューすると、「自分は自己肯定感が強く、以前は集中できていると思っていたが、実は集中力がもっと必要だと分かった。」「以前は自分に疑問を持たず集中できた。今はできないことに気づいて悩むようになった」と答えた。すなわち、自己をより客観的に見ることができるようになり、又は、より高い次元で自己評価できるようになり、マイナス評価に転じたことが分かる。

「舞踊Ⅰ・Ⅱ」等の身体表現を目的とする科目については、「自分という枠から外れた自分と出会えた」「頭で考えて伝えるよりも難しく感じた。そして、言葉で伝えるよりも見てくれる側に考えさせるものがある」「自分の体が何となく発している情報とか、今は少し分かる気がする」など、自己や他者との対話における身体性の意味に気づき、教科「演劇」で「舞踊Ⅰ・Ⅱ」等を履修する意味を肯定的に捉えるコメントがほとんどであった。

自由記述で、感銘を受けたことは、職業選択や生き方への影響である[*10]。「誰かと関わるときにはしっかり関わりたい。関わっていける」「生きていく上でのベースになった」「自分の思考に影響をもたらす」「無神経なままでいたくない」「いろいろなことを知りたいと思えるきっかけをもらえた」「人とたくさん関わりたいと思えていることが衝撃である」「いままでは避けてきた道を通っていきたい」「人との関わりのある職業に就きたいと、はっきり言えるようになった」とのコメントが寄せられた。これらの文言は、本校のコミュニケーション教育の意味と効果を明らかにしている。

次は、卒業公演を終えた生徒の感想である。

「この授業を受けて、人の気持ちが考えられるようになった。セラピー的[*11]。豊にさせてもらった」

「以前は自分を見せたくなかった。自画像公演の前後で自分が変わった。クラスでも素直になれた。演劇の授業がなければ学校をやめていたかもしれない」

「話すことからだ、話すことだ！」

6　成果と課題

(1) コミュニケーション力を育成する場－日々の「舞台」で「演じること」

本校の芸術表現系列における教科「演劇」は生徒のコミュニケーション能力を開発し、

自己を洞察する力や人と関わろうとする意欲を高め、総合的なコミュニケーション能力を開発し、職業観や人生観にも大きな影響を与えている。

本校は、学校の教育活動全体で、生徒のキャリア教育を展開しており、各科目や特別活動、部活動等々は、それぞれ、生徒の能力開発の一部を分担している。教科「演劇」については、それらの能力開発の基礎となるコミュニケーション能力を、知性、心性、身体性全体に渡って開発できることが分かった。

ワークショップ型の授業は、それぞれのプログラムで、生徒に多様な「舞台」を提供し、様々な役割を「演じること」を数多く体験させる。公演の重要性、多様な観客との対話の教育効果も計り知れないが、日々の授業において「舞台」と役割を「演じること」を経験し続ける意味はそれ以上に重く深い。本校の実践は、授業の中で、非言語的な感性や身体性を大切にし、適切な「舞台」を設け、自己や他者、集団の役割を「演じること」が、自己開示や人間関係の洞察に効果的であることを明らかにしている。

(2) 生徒と教職員の総合的なコミュニケーション能力開発

生徒全体のコミュニケーション能力は、教室内外での人間関係形成において重要である。また、教職員のコミュニケーション能力は、授業の基礎、生徒指導、部活動等あらゆる場面で求められる基礎的な能力である。

このようなことから、本校では、1年次生全員と教職員に対してコミュニケーションワークショップを実践している[*12]。その効果についての評価をすることは時期尚早であるが、本研究で明らかになったワークショップ型授業によるコミュニケーション能力開発の有効性に通じる結果を予想して取組を進めていきたい。

本校の授業を見学した教員から、「これは授業ですか？」[*13] との疑問の声が発せられることがある。生徒主体とはいわれながらも、教えるべき「知」があり教師が誘導する授業を見慣れた頭ではなかなか理解されない光景である。本校の授業実践を多くの方々に見ていただき、場合によっては生徒と共に体験していただき、理解者を増やしていきたいと考えている。併せて、本校の実践は、県内外の学校教育及び教職員現職教育の充実と特色化に資する可能性を秘めていると思われ、本校の実践を積極的に発信していきたい。

現在は、ややもすると、この種のワークショップの実践者は、演劇人、演劇関係者に止まっているが、バックグラウンドが異なっていても、生徒との良好なコミュニケーション能力が構築できる教師であれば実践は可能であると考える[*14]。むしろ、美術や音楽はじめ、他の分野の教員、教育相談の専門家等の教員が系統的な研修を受ける機会とシステムが出来れば、一層教育効果の高い実践が可能なのではないだろうか[*15]。

東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所事故により大きな被害を受けた本県においては、除染や地域コミュニティの再生、経済や文化の復興とともに、本県の未来を担う児童生徒の健全な育成が重要であり、本校の実践は、このような視点からも大きな役割を果たしうると確信している[*16]。

---

*1 石井路子教諭は、福島県立内郷高等学校時代の平成13年4月に赴任して総合学科改編に携わり、芸術表現系列教諭・演劇部顧問として、学校設定教科「演劇」の教育課程と系統的な指導について研究・実践を重ねた。平成26年4月より、大阪・追手門学院高等学校表現コミュニケーション教諭として活躍している。

*2 文部科学省は、平成22年5月に、文部科学副大臣主催「コミュニケーション教育推進会議」を設置し、平成23年8月に審議経過報告「こどもたちのコミュニケーション能力を育むために～「話し合う・創る・表現する」ワークショップへの取組」をまとめた。同会議は、平田オリザ氏が座長を務めた。国内の先行事例と共に、イギリスの創造性・文化教育、韓国の事例等も紹介されて議論が進んだ。

*3 日本経団連「2012年度・新卒者採用に関するアンケート調査結果」(平成23年7月)。経団連会員企業が重視する上位５項目は、①コミュニケーション能力82.6%　②主体性60.3%　③チャレンジ精神54.5%　④協調性49.8%　⑤誠実性34.2%である。

*4THE DEFINITION AND SELECTION OF KEY COMPETENCIES Executive Summary
http://www.oecd.org/pisa/35070367.pdf

*5 新課程になり、「舞台技術」2単位、「演劇概論」2単位がなくなった。全体的な調整の結果であるが、演劇を通したコミュニケーション教育に必要な科目に精選されたと言える。過去には、2年次に、自画像公演とアトリエ公演を実施していたが、アトリエ公演は、第10期生「ブルーシート」を最後に実施していない。石井路子が立案し実践した授業の構成については、石井(2008)にまとめられている。大枠では、他者理解に先行して自己理解のプログラム(自画像公演を含む) が重視される。そして、自己理解は自身の身体を理解することから始まる。よって、本校の授業では、ストレッチや筋トレも重要であり、「舞踊Ｉ」等の科目の重要性もこの文脈で捉える必要がある。全ての場面で、教師と生徒の対話が重視される。ストレッチや筋トレ中であっても同様である。音楽も効果的に使用される。

*6 石井(2008)によれば、このプログラムは、故秋浜悟史氏(1939－2005　劇作家、演出家、岩手県生まれ)が指導していた兵庫県立宝塚北高等学校演劇科「劇表現」のプログラムを参考にした。

*7 早稲田大学文化構想学部の水谷八也教授は、石井路子との対談の中で、「ランダムウォーク」を見た印象を、次のように述べている。「ランダムウォーク、アップテンポの曲をかけながらやるじゃないですか。僕、あれだけで感動しちゃうんですね。多分、生徒一人一人が、その個人であるということが伝わってくるんですよ。これ見よがしじゃなく。媚びるでもなく、ごく自然に。まずそのたたずまい、存在自体に感動してしまいます。」

*8 石井(2008)によれば、桐朋学園芸術短期大学部の越光照文教授の講座を参考にして、石井路子が改編した。

*9 演劇担当は、継続的に生徒に対するアンケート調査を実施している。その一部は、石井(2008)、石井(2009)、石井(2010)等に発表されている。

*10 教科演劇の目標は俳優の養成ではない。中には、大学で演劇教育を学ぼうとする生徒や舞台関係の職業に就きたいという希望を持っている生徒もいるが、就職も含めて進路先は多様である。

*11 朝日新聞は、平成26年2月19日から、教育欄で、愛知県立刈屋東高等学校（昼間・夜間　定時制・通信制課程）での兵藤友彦教諭の実践を連載した。昼間定時制に通う生徒の6割が不登校経験者という同校において、「人と向き合う力をつけさせたい」と、平成18年より「演劇表現」の授業を開講している。

*12 文部科学省「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験(芸術科派遣）事業」を活用している。平成26年度の「1年次コミュニケーションＷＳ」は、「芸術を愛する心を育て、豊かな情操を養うと共に、コミュニケーション能力等の育成を図る」ことを目的として、年間を通じて各クラス4回実施する。「産業社会と人間」及びＬＨＲの時間の一部を利用している。教職員向けには、平成25年2月17日に、「教職員コミュニケーションＷＳ」を実施した。参加者は40名、2回に分けて実施した。事業の実施主体は、NPO法人PAVLICである。

*13 同様の指摘が、「文部科学省復興教育支援事業におけるArts Vision Network 311関連団体の実施授業に関する調査・分析・評価」2012年度報告書にも見られる。

*14 石井(2014) は、指導者の役割について、次のように述べている。「そこには学びをサポートできる伴走者＝大人が必要だと思っています。学び手が、「今の自分」を意識化し明確化できるよう手助けをする大人。教えるのではなく、生徒自らが発見するまで根気よく対話を重ねる、学び手の立場にも立てる大人。そのサポートを得た時ようやく、生徒は自分と向き合うことができるように思います」

*15 東京学芸大学附属高等学校の浅田孝紀氏は、平成23・24年度に「児童生徒のコミュニケーション能力の向上に資する芸術表現体験」事業において、国語教育（古典）における実践を行っている。沖縄、いわき等の教育センターでも教員向けのプログラムが実施され、企業における研修プログラムも多数開発されている。大阪府教育センターは、平成23年度に、「演劇活動を通じて、コミュニケーション能力を育む指導力向上研修プログラム」の開発を行っている。北海道教育大学は富良野ＧＲＯＵＰ（代表　倉本聡）と、琉球大学教育学部は沖縄県立総合教育センターと、それぞれ連携して教員研修プログラムの開発を行っている。東京都私学財団は、教職員向けの講座「ドラマケーション研修」を開催している。

*16 石井(2013)は、震災と芸術教育との関係について、次のように述べている。「芸術文化が持つ力は数値には表すことのできない漠としたものだ。けれどもその力が今、学校にも被災地にも必要とされているように思う」